

●最優秀賞

これからの地方創成の一考察

～平成27年度浦戸諸島訪問活動から～

山形県南陽市立梨郷小学校 よどのひでき
淀野秀樹



1 はじめに



梨郷（りんごう）小学校は、山形県の置賜（おきたま）地区の中央、南陽市の西縁、梨郷地区にあり、創立144年目を迎える全校児童70名の小規模校である。おかひじきや青菜、白菜等の伝統野菜を中心とした畑作地域に、多くの方々と地域から温かく支えられ、笑顔の絶えない素直でやさしい子どもたちがすくすくと育った。

学区の梨郷は、山形県の南部、置賜地方にある戸数461、人口1,600名の小さな地域である。明治はじめより畑作が盛んで、養蚕の桑の栽培や稲作が中心であったが、生糸相場の暴落により転換した畑作、特に白菜の採種と栽培が当たり、昭和のはじめから昭和40年代まで、「①白菜」というブランドで関東市場に貨車を使い大量に出荷し大変な賑わいを見せた。しかし、技術の進歩と関東近郊地との産地間競争の結果、白菜

は下火となり、その後は、青菜やホップ、ごぼう、西瓜、おかひじきなどの産地として存在感を維持、農業従事者の高齢化や後継者問題を抱えながら、梨郷朝市の開催等、地域をあげての懸命な農業復興への挑戦が現在も続いている。

明治6年に四つの字（あざ）地区が協力して、本校の前身「集成学校（しゅうせいがっこう）」の準備校（竹原学校）を設立、その後、多くの越境入学者を迎えて県南有数の隆盛を誇った。しかし、昭和18年に728名であった児童数は戦後の混乱や産業構造の変化、野菜産地としての変移により減少の一途を辿り、町村合併を経て市政施行「南陽市」がスタートしたが、人口減少が続き、呼応するように本校児童数も減少、平成28年度にはピーク時の約10分の1以下の（計7クラス）70名となり、創立144年目にして複式学級が誕生した。また、地域から働き手と子どもの影が消え、専業農家が減り、若い世代が都会へ流出。また、自慢の野菜は大量消費の中で産地集約が進み、「梨郷」の地名を冠した産品は次第に勢いをなくしつつあった。

農業の担い手は70歳代を中心とした世代で、その伝統や文化を引き継ぐはずの世代（30～40歳代）が減少、生徒数減少により6年前に中学校も統合され、働きに出ている大人を除くと、昼間のこの地区には元気な高齢者と少数の子どもたちだけとなった。

そこで本校では、学校課題の解決と地域の教

育力の再興を図るために、平成24年度に策定された第五次南陽市教育振興計画に基づき、南陽市教育委員会が提唱する地域総合型教育を導入し、学校の創設の背景と原点を起点に学校経営と教育課程のブラッシュアップを図った。その中で、学校研究と教育課程改善、学校と地域を結ぶ関係改善を図り、地域振興と教育振興をめざす社会参画活動を展開する中で、一人一人に自信をもたせ、将来を見据えて、ふるさとを愛する子どもの育成を図ることとした。

平成25年度から、公民館との連携（社学融合）や梨郷の教育ビジョンの提示、教育課程の改善と新構想（四つのステージ）、学校研究との連携・連動・一体化、全国から参加者を集めた公開研究会での検証、社会参画活動の活性化に取り組みながら子どもたちの育成に取り組んだ。

特に、梨郷地域の良さを体感できる食農教育は、学校と地域の間に教育活動を創造し、「子どものうぎょうせいさんほうじん のびのびファーム」という会社組織を模した学習チームで、多くの人々に支えられながら、6次産業化の実践学習に使命感をもち懸命に取り組んできた。

平成26年度からは福祉教育も併せてスタート。被災地への支援活動への理解の促進や教育目標の児童像「他にやさしい子ども」の育成のために、全校道徳「いのちとぎずなの授業」、平成28年度には、キラキラドリームタイム（毎週金曜日、特設キャリア学習の時間）で、定期的に

福祉教育講座（ぼらんていあひろば びよっこ）を開設した。

2 本校の食農教育について

本校では15年前より豊かな自然環境を活かし、学校行事に使う野菜を学級ごとに分担して栽培している。さらに、創立140周年あたる平成25年度より6次産業化を学ぶために、学校内に「子どものうぎょうせいさんほうじん のびのびファーム」という食農・食育実践学習チームを立ち上げた。（参加児童H25は19名、H26は40名、H27は31名、H28は30名）

主な活動としては、地域の農家の方から畑（3反、900坪）をお借りして、各学年に関係する農家の方々（父母、祖父母）や畑の先生（農業従事者）にご指導をいただきながら、芋煮会の野菜（里芋、ねぎ、大根）、枝豆やじゃが芋、葉物野菜（白菜や水菜）やさつま芋を作った。のびのびファームでは、生産物は各地域（梨郷、宮内、沖郷、川西）の朝市や直売所で販売し、地域の方々と交流を深めながら、ふるさと梨郷の良さを体感する学習を重ねてきた。

初年度（平成25年度）は売り上げの中からフィリピン台風の被害に遭われた方々に義援金を贈る活動を行ったが、その活動を振り返り、次年度（平成26年度）は、「活動の実感をもち体験できる取り組み」を考え、「美味しい梨郷の野菜を被災地に直接、自分たちの手で届けたい」という意見が児童から出され、「寒風沢島に野



食農教育ポスター



のびのびファーム入社式

菜を届けよう！」という活動が生まれた。同年の秋に、(11月上旬) 31名の児童を含め、教職員、保護者、地域の方々計65名が訪問し、寒風沢島を含め塩竈市と大きな交流の機会が生まれた。

3 のびのびファーム3年目スタート (被災地訪問2年目)

平成27年度に入り、どうしてもリーダーになりたいという3名の児童の希望から「のびのびファーム」は分社化し、生産管理会社社長、加工包装会社社長、営業販売会社社長の3名の体制になった。4月12日(日) 梨郷朝市オープンの日から活動が始まり、寒風沢島に行きたいと考えている児童が総勢30名集まり、児童会の社外役員2名(うち1名はすでにのびのびファーム)を迎えて、「子どものうぎょうせいさんほうじん」の3年目がスタートした。

方針は主に次の三つである。

- (1)朝市の活動を通して、地域に元気と笑顔を届けていく
- (2)寒風沢島をはじめ浦戸諸島の皆さんに「百年白菜」を届ける



H27梨郷朝市での3社長



ひまわりプロジェクトポスター

- (3)ひまわりプロジェクトで梨郷地区の思いを福島に届ける

4 小学生の出張

5月の連休明け、浦戸小中学校の教頭先生から白菜のタネの採種予定のご連絡をいただいたのですぐに、のびのびファーム社長3名とその保護者の方に説明をした。市教育委員会へは学校行事扱いの届出を行い、採種体験に梨郷小学校代表として参加させていただくことが決まった。車ではなく、JR東日本を活用しながら出かけることにした。

同年7月14日(火)、3社長は、浦戸小中学校のある塩竈市浦戸野々島に百年白菜の復活のために、JR赤湯駅から山形及び仙台を経由して本塩釜駅へ、徒歩でマリゲート塩竈に向かい、列車と船を乗り継いで現地へ向かった。ひと小学生の出張である。

採種体験では、昔、野々島等でタネを採る仕事をしていたおばあちゃんたちに教えてもらい、児童交流会では、宮城県内の小学校や特別支援



定期船上にて 3社長



野々島で採種体験

学校の子もたちと交流をしながら、精一杯、梨郷地区と梨郷小のアピールをがんばったとのこと。そして、大切な白菜のタネをいただくことができた。夕方、JR赤湯駅に到着。保護者の出迎えを受けた。翌日の全校集会で報告を終え、採種の様子やタネを校内に掲示した。それからすぐに、たくさんのタネを持ち帰った子どもたちの願いを叶えるために、学校農園のオーナーの方がお盆前に苗作りを教えてくださいましたことになった。昔ながらの白菜の栽培が始まり、ようやく百年白菜の復活の第一歩となった。

5 播種と植栽

夏休みに入り、無事に平成27年度の初出店を終え、スタートした。8月11日の午前中は、のびのびファームの子もたちの手で白菜のタネが蒔かれた。野々島からいただいたタネで千本を超える苗ができるように準備を進めていった。タネ蒔きの3週間後、夏休みも終わり、白菜のタネは多くの方々のお陰で大きな苗に育ち、9月3日に全校児童により植栽した。その日は、白菜の学習を兼ねて、「いのちときずなの授業Ⅳ」を実施、宮城県仙台市の私立明成高等学校の先生方やウェザーハート災害福祉事務所の方々にご来校をいただいた。午前中に白菜の歴史について学び、午後からは千本を超える白菜の苗を全校児童、先生方、地域の方々、保護者の代表の方、地区訪問団の方々の手で「百年白菜」として、砂塚の学校農園に植えることになった。地域と保護者の多くの方々に参加いただき、みんなの気持ちが伝わるようにと元気に笑顔で植栽を行った。

6 のびのびファームのチャレンジ

寒風沢島に出発するまでの8月～11月の約3ヶ月間、経費を調達するために子どもたちは朝市に立った。必要経費は一緒に行ってください大人の方々の経費がほとんどを占める。地域というバックアップがなければ、子どもたちだけでは行けないので、何とか実現しようと本当



H27梨郷朝市初出店



野々島からの白菜の播種



第四回のいのちときずなの授業



宮内での出店の様子

に一生懸命に取り組んできた。10月以降は学年で野菜を作って販売するという学年ファーム（生活科・総合的な学習）と時期が重なるので、のびのびファームのメンバーは梨郷の地区外に出かけることが多くなり、特に隣接地区の宮内のげんき熊野市にも出店した。宮内は夕鶴のつるが売られていた市があった場所であるという（諸説あり）。多くのお客さんがいつもののびのびファームの子どもたちを待っていてくれる街である。

7 事前説明会と結団式

教職員の事前踏査を受け、10月29日（水）午後6時30分から参加者への説明会を行った。日程や持ち物、約束事などを地区訪問団の皆さんや児童と保護者、先生方を含め80名で確認した。はじめに地区長会長さんからご挨拶をいただき、続いて児童を代表して3名の社長が「梨郷の美味しい野菜と元気と笑顔を届けたいのです。どうかどうか保護者の皆様、先生方、地域の皆様、私たちを寒風沢島に連れて行ってください！」という大きな声で訴える様子が印象的だった。とても良い雰囲気です事前説明と結団式を終えることができた。

8 前日準備、そして、収穫

11月8日（日）午前中に白菜や大根の収穫と荷造り、積み込みが行われた。雨の中で大変な作業だったが、学校農園のオーナーの納屋をお借りして、シール貼り等の準備が順調に進んだ。続いて午後1時に地区訪問団が寒風沢島向け出発した。雨模様の中、塩釜港へ向かった。訪問団員は20名。海は少し波が高く、本当に寒い日だった。

翌9日（月）代休日、児童31名と先生方や保護者の方々14名は朝6時半に学校に集合し、南陽市社会福祉協議会の福祉バスに乗り、2時間半で塩釜港に到着。午前9時半の市営汽船で先生方と保護者の代表の方々とともに大きな白菜と大根とともに子どもたちは海を渡った。子どもたち



浦戸諸島に貼られたポスター



前日の収穫作業

の思いが天に届き、晴天となるようにと祈った。

9 地区訪問団の役割

今年度は、より円滑に進むようにと、多くの方が前日入りを担って向かうこととなった。ほかにも、多忙にもかかわらず、関係先への連絡調整、準備にあたっていただいた。学校と学校の交流にとどまらず、地域間交流に育てたいという願いから、寒風沢島と梨郷地区訪問団の交流会が行われた。互いの地域のこと、少子高齢社会の様子、未来への展望について交流が行われた。

その間も大雨は止まず不安がよぎる。そういった中で梨郷と寒風沢島の天気や状況の確認が夜中まで続いた。翌朝、奇跡的な天気回復、快晴の空。やはり浦戸諸島は龍樹っ子を今年も満面の笑顔で迎えてくれた。

10 そして、当日

朝6時20分に梨郷を出発。南陽市の社会福祉協議会から出してもらった福祉バスに乗りし



福祉バス乗車 梨郷小

た31名の子どもたちは、約2時間後の午前8時40分に塩竈港に無事到着した。乗船式の後、野菜を寒風沢島の方の漁船に積み込んで、午前9時30分市営汽船で浦戸諸島へ出発。そして、約30分後、三班に分かれ、野々島や寒風沢島、朴島に降り立った龍樹っ子は、元気に笑顔を忘れずに戸別訪問を行って、白菜と大根と手紙を渡していった。

第一班は、浦戸小学校の児童15名の皆さんと一緒に回る班で、当日は港近くの浦戸諸島開発総合センター（ブルーセンター）に学習場所を移動して対応していただいた。野々島に34セット、浦戸小中学校に58セットを届けた。第二班は寒風沢島に54セット、二班に分かれて軽乗用車に荷物を積み配付した。1年ぶりにお会いする島の皆さんとお話をしながら丁寧に配付を行っていった。第三班は朴島に6セット、地区訪問団長さん、PTA会長さん、校長と2名の児童が初訪問した。

その他、塩竈市に13セット、合計175セットをお届けすることができた。先々で笑顔でお出迎えいただき、声をかけてくださり、嬉しい一

瞬一瞬だった。今年の7月に野々島でいただいたタネで白菜を育てお届けする「百年白菜」の復活の物語が始まった。

朴島では、区長さんがお出迎えくださった。6軒を回り、渡辺採種場の委託白菜の採種場を見学した。そこは3反歩（900坪）くらいの広さに平らな畑が広がっていた。（下段写真上）その後、子どもたちは一斉に、交流会のために寒風沢島の総合漁民センターに集まってきた。朴島班では、市営渡船の運転の仕方などを聞きながらどきどきしながら戻ってきた。

午後0時から、昼食を兼ねた子どもたちとの交流会。笑顔と元気な声がこだまし、会場は熱気に包まれた。子どもたちの寸劇と合唱、よさこいの披露（下段写真下）の後、南陽心山連の皆さんのすばらしい踊りの披露があり、結びに会場のみinnで「うらじゃ」を踊った。参加者全員から笑顔があふれた。寒風沢区副区長さんからは、子どもたちの素直さと一生懸命さに心温まるお褒めの言葉をいただいた。また、最高の山形の芋煮を寒風沢島の方々に食べてもらうというミッションがあり、そのために5月に



朴島の採種場



各島での訪問活動



ソーランの演舞



漁民センターでの交流会



寒風沢島一周の乗船体験

芋煮用の「どだれ」という里芋やねぎを植栽して、寒風沢島で食べることをかなり意識して子どもたちがつくったものであった。山形県外で初めて食べる芋煮だったが、多くの方々の真心の入った素晴らしい芋煮で、しかも凄い出来映えだったので、「今まで食べた中で一番おいしい!」との歓声があがった。ご参加いただいた寒風沢島の皆さんも本当においしいと喜んでくださった。寒風沢の方々と一緒に、同じ「竈」(かまど)のご飯(コシヒカリ)と鍋(芋煮)を食べることができたことは本当に良かった。そして、大きなカニのプレゼント、また、全員で撮った記念写真等々、かけがえのない宝物をいただいた。次に、短い時間でしたが寒風沢の6名の漁師の方にお世話になり、漁船に乗船体験をさせていただいた。子どもたちは一生の思い出になったと思う。寒風沢島の皆様に感謝した。

午後2時過ぎ、多くの皆様にお見送りをいただき、寒風沢島を後にした。マリンゲート塩竈に戻った子どもたちと地区訪問団は、塩竈市役所をはじめ、塩竈市社会福祉協議会のみなさんのお見送りをいただき、仙台市若林区の慰霊碑にお参りをして、予定通り午後6時過ぎに学校に戻ることができた。

児童作文より：寒風沢島、野々島、朴島を訪問して、のびのびファームで育てた白菜、大根を届けたら、笑顔で「ありがとう」と言ってもらえてうれしかったです。私は、野々島の人たちに野菜を届けてそう思いました。人の笑顔を作るには、四つの気持ちが必要です。やる気、元気、根気、本

気です。この気持ちがあれば、みんなが笑顔でいられます。そして、笑顔だということは、「幸せ」にもつながります。もう一つあります。笑顔にするということは、身近な人に笑顔でいてほしい、と思う気持ちから始まると思います。しかし、私の身近な人だけが笑顔でも、みんなは笑顔にならないかもしれません。もし世界中の一人一人の身近な人が笑顔でいられるとすれば、それは、その人たちも、その人たちの周りも笑顔になれると思います。つまり、私自身が笑顔でいることも大切だということになります。なので、私たちのびのびファームが笑顔でいれば、寒風沢島、野々島、朴島の方々もいつか「幸せ」と思える日が来るのではないかと考えると、今まで以上にもっと元気に、もっと明るくファームの活動をがんばっていきたいです。そして、島が去年行った時よりも少しずつきれいになっていたのでよかったです。そして、また少しずつきれいになってほしいです。私は来年行けないけど、寒風沢島、野々島、朴島のみなさんに、笑顔で元気になってほしいと願っています。

保護者感想文より：娘は昨年に続き二度目のプロジェクト参加となりますが、その楽しみにしている様子たるや尋常ではありませんでした。『何が彼女をそうさせるのか、この目で見てみたい。』そんな好奇心と少しでも皆様のお役に立てるのであればとの思いで、自分もこのプロジェクトに参加させていただきました。なるほど、島での娘の様子を見てわかったような気がします。大きな船

で島に渡り、自分たちが一生懸命育てた白菜と大根を島の方々へお届けし、感謝の言葉と笑顔で受け取っていただける。島の方々の喜ぶ姿を想像し、そのうえ昨年覚えた普段味わうことのできない達成感と充実感を思い出したら、娘はちょうどして(おちついて)なんかいられなかったのでしょうか。実際大人の自分でも、漁船の速さを肌で感じたり、島の方々と子どもたちとのほほえましい光景を目にしたりするなど、新たな発見や人の優しさに触れ、いつにない新鮮で幸せな気持ちになりました。何より、浦戸小の子どもたちと早々に仲良くなる様子や緊張しながらも堂々と人前で挨拶する娘の姿に、確かな成長を感じられたことは、親としてこれ以上ない喜びでした。このように貴重な経験をさせていただけたのも、畑の管理にご尽力いただいた佐藤さんご一家、休日返上で事前準備や子どもたちと畑仕事に励まれた先生方、そして、我々の訪問を温かく迎え入れてくださった浦戸諸島の皆様のおかげと感謝しております。いろいろなお意見があらうかと思えます。それでも、白菜が取り持つこのプロジェクトが、この先永く続けられ、浦戸諸島と梨郷地区の方々が絆を深め、良好な関係を築かれることを願っております。

地域参加者感想文より：小学校及び公民館は地域の拠点です。この拠点が地域に開放され、多くの方が参加出来る場になり、身近な教育現場になっている感じがします。その一つの行事として、この度、本地域で昔から植栽されて来た農産物「白菜・大根等」を活用して、平成23年3月発生「東日本大震災」で被災した浦戸諸島との交流を深める新たなプロジェクトに取り組んでいるのは公民館だよりで知ってはいましたが、実際この機会に参加することができ、自分が過ごしてきた子供の教育に向けての頃とは視野の広さ、情操教育の豊かさに驚かされています。

11 御礼の言葉

塩竈市や寒風沢島の皆様から御礼の言葉をい

ただいた。「梨郷地区の皆様、御礼を申し上げなくてはなりません。宝物のような子どもたちを小さな親善大使として、宮城県塩竈市浦戸諸島に派遣してくださった保護者の皆様、ともに取り組んでいただいた地域の皆様、学校の先生方、そして、関係の皆様へ感謝申し上げます」。涙の出るような微笑ましく、とても嬉しい気持ちになった。特に、寒風沢島の皆さんには、お忙しい中におもてなしの心を込めて、迎え入れのご準備をなさってください、「かえってありがたいな」としみじみ思えた。今までと同じように、品物やお金を送れば良いと考えるだけでは「いのちと絆」は繋がらないのだということを理解することができた。この素敵な御礼の言葉には万感の思いがあり、やはり両地区の繁栄をともに考えることこそが大事なのだと考えざるを得ない。もうすでに、一つの地域だけ、例えば梨郷だけで何とかしようというのは難しい時代がやってきている。だからこそ、多くの地域と直接手に手を取り合って、がんばっていかなくてはならない。その姿を子どもたちの活躍から学んだ気がした。また、そういった中でこそ子どもたちを育てていきたいと考えた。

いのちと絆のプロジェクトは、決して梨郷地区の美味しい野菜の宣伝だけでなく、被災地支援だけでもない。双方向の協力と信頼が実を結ぶことを目的とした事業であり、多くの皆様の温かい理解と協力で、子どもたちの強い意思が大きな力「絆」に育っていることを多くの方々に知っていただければと思う。来年も是非、継続できるようにと心から祈りたい。

5年生が書いた作文が南陽市のコンクールで入選した。この児童は今年、のびのびファームの4代目の社長になり、3度目の寒風沢島訪問に向けてリーダーとしてがんばっている。

《小学校の部》最優秀
のびのびファームの活動から
南陽市立梨郷小学校 五年 朝倉 愛子
私たちの学校では、「のびのびファーム」という

活動をやっています。そこでは、地域の方々と協力しながら野菜を育て、収穫したものを朝市などで売っています。私たちのがんばっている姿をみて、地域のみなさんが笑顔になってくれればいいなあと、私は参加しています。昨年、のびのびファームでは、東日本大震災で津波の被害にあった寒風沢島を訪問しました。私たちが育てた白菜と大根、そして、笑顔をとどけに…しかし、津波の被害は、想像以上のものでした。海の近くの家は、ほとんどこわされていました。また、残った土地や建物には、高い津波のあとがくっきりとついていました。一目で、津波のおそろしさが分かり、たいへんな場所に来たんだなあと思いました。寒風沢島では、いくつかの班に分かれて、白菜と大根をとどけました。もちろん、笑顔と手紙もいっしょに。また、のびのびファームでは、朝市でいただいたお金を海外へ寄付する取り組みもしています。世界にはこまっている人がたくさんいるという話をよく聞きます。このお金でそのような人達が一人でもへってくれればうれしいです。ファーム活動は、たいへんなことが多いのですが、このような喜びがあるので、私はこの活動を続けてがんばっています。(中略)私は、のびのびファームの活動を通して、みんなが笑顔になればいいなと思っています。かなしんでいる人やこまっている人がいたら、助けたり助け合ったりする社会になればいいなと思います。そのために、私はのびのびファームの活動をこれからも続けて、まわりの人が笑顔で元気になるようがんばっていききたいと思います。

12 今後に向けて

食農教育を取り組んできたが、何のためにという目的意識をもたせることが重要であることに気づいた。

例えば、○ふるさと梨郷に寄せる気持ちを育てること ○多くの方に梨郷の野菜のすばらしさを知ってほしいという願い ○野菜だけでなく笑顔や元気を届けたい ○多くの人が幸せに

なるために自ら考えて行動する子どもの育成等、教育と食農そして福祉との連携を進めてきた4年間であった。

自分の将来への夢をもち、人のために、地域のためにと笑顔で元気ががんばる児童に励まされながら、創り上げた教育活動。たくさん話題を発信し、地域に元気と活力を生み出していくという「地域総合型教育」の実践力を確認することとなったのである。梨郷という小さな小さな地域が日本中や世界中と結びつき、誇りと展望をもち、隣接の地域と協力しながら南陽市を支え、子どもたちとともに楽しく取り組んでいくことが地方創成の新時代を築く新しい地域振興、教育活動となると信じている。

結びに、本校PTA及び梨郷公民館、南陽市社会福祉協議会並びに塩竈市健康福祉部生活福祉課、塩竈市教育員会、浦戸振興課、塩竈市社会福祉協議会をはじめ、ご理解とご支援をいただいた多くの皆様に心から感謝を申し上げたい。



漁民センター前での記念写真

〈参考文献〉

第五次南陽市教育振興計画 平成24年3月

山形県南陽市教育委員会

南陽市立梨郷小学校公開研究会研究紀要 平成27年10月

同 報告書 平成27年12月

龍樹っ子のちと絆のプロジェクト 第一章

実施報告書 平成27年3月

龍樹っ子のちと絆のプロジェクト 第二章

実施報告書 平成28年9月